

現状と対策を聞く

●●●●

— HIVに感染すると体内では何が起きるのか

「Tリンパ球という免疫の司令塔のような細胞が破壊されます。その結果として、免疫力が低下し、5年から10年で免疫が破綻を迎え、細菌やカビ、ウイルスへの抵抗力を失ってしまいます。この状態をエイズと呼びます。症状がない間も体内ではウイルスが増え続け、他の人へも感染しますし、身体の免疫力はしだいに低下しますから、風邪をひきやすいとかよく下痢をするなどの前兆があります。たとえば、若いのに帯状疱疹を繰り返すようになったら要注意。HIV検査を受けてください。」

— 感染していることが分かったら、発症を未然に防ぐことはできないか

「できません。早期に感染していることが分かったら、2、3カ月ごとに通院してもらって免疫状態を監視します。次第に免疫が低下して発症しそうになったら治療薬を投与して免疫を下げ支えし、エイズの発症を未然に防ぎます。ただしこの薬は副作用が強いので、長期間内服していると薬剤耐性の問題で薬の効

きが悪くなることもあるので、本当に必要なまでは服用は待ったほうがいいと考えます」

— エイズは死なない病気になったというが

「確かに現在では、早期に発見し、医師が免疫を監視しながら薬を投与すればHIV感染者は健康な人とほとんど変わらぬ生活を送ることができるようになりました。しかし今でもエイズが発症して非常に重い状態で病院に運び込まれた場合、まだまだ亡くなる方は珍しくありません。だからここを検査を受けて、早期に発見することが重要

ましよう。ゲイの病气、若者の病气というのは間違った受け止め方です」

— 感染者は増え続け、HIVの感染は着実に社会の中に広まっているが、将来にHIVを世界からなくすることは可能ですか

「アメリカでは1992年から95年までエイズが若者の死因第一位で、このごろは真剣にエイズでアメリカは滅びるのではないかと危惧されました。今はHIVを押しさえ込む薬が開発されてエイズで国が減るようなことはないと思いますが、HIV

症は、いくら予防法や治療法がはつきりしていてももう追い出すことはできないものです。むしろ撲滅しようという考え方が、感染者への偏見・差別につながっているように思います」

— いまだに社会にはエイズに対する偏見が根強いが

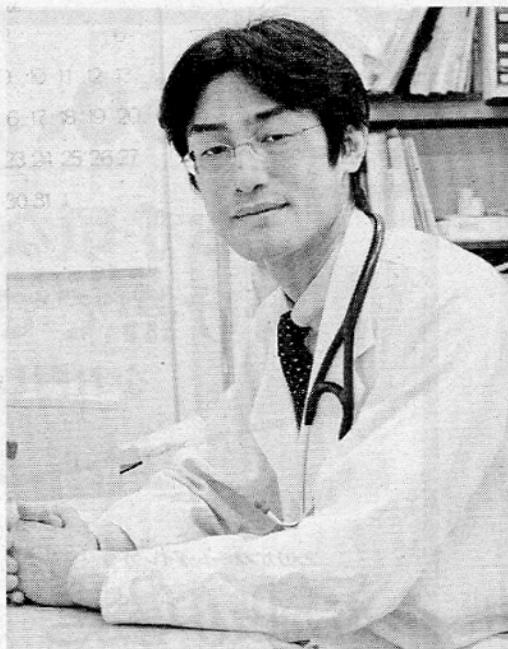
「現状はHIVのイメージが独り歩きしていて、社会は必要以上に恐れています。医療者の間でもHIVというイメージに尻込みしてしまう人もいます。何か特別なもののようないです。何か特別なもののような扱いを受けていますが、科学者の視点に立ち返るとただのウ

「等身大」の付き合い

なのです。1980年以降にコンドームなしで性行為をされた経験があまりでしたら誰でも感染している可能性があると考え

イルスです。しかも結核のように空気感染するわけではなく、濃厚な接触がなければ感染しません。昔はそれでも騒がれたのは死に至る病だったからです。が、死ぬといっても即死するわけではなく、発症するまでに数年かかる緩慢な病气です。しか

佐久総合病院総合診療科 高山義浩医師



高山義浩（たかやま・よしひろ） 福岡県出身、36歳。東京大学医学部保健学科、山口大学医学部医学科を卒業。国立病院九州医療センター、九州大学病院を経て、平成16年より佐久総合病院に勤務。学生時代よりアジアの健康問題に関心を持ち43カ国の医療現場を訪問。著作に『アジアスケッチ』目撃される文明・宗教・民族』（白馬社）がある。本紙長野県版に研修医時代の経験を書いた「ホワイトボックス」を連載中。

「等身大」のHIV・エイズと付き合いができるように変わっていかねければなりません。社会のそこにあるHIVに個人個人が注意深く予防し、でもやっぱり感染してしまつたら差別したり哀れんだりするのではなく、高血圧や糖尿病のように完治が難しい慢性疾患を抱えた人と理解し、今まで通りつきあってゆけばいいのです。私たち専門医の手元には、HIVについての多くの知識と技術があります。だから、もし自分がHIVに感染しているかもと感じている人は、事実を知るところを恐れずに検査を受けてください。孫子の兵法に『彼を知り己を知れば百戦して殆うからず』というものがありますよね。HIVに巻き返しをはかるためには、私たち自身について知ることが次に求められているのだと思っています」